

## A-1

カザフ語の *siyaqti* 「～ようである」は間接証拠性を表すのか

日高 晋介

(日本学術振興会特別研究員 PD/新潟大学)

【要旨】カザフ語 (チュルク諸語北西語群) の *eken* は従来の研究で間接証拠性 (伝聞・知覚・推論を通じた認知、意外性、民話などの口承文芸での使用) を表すものとされているが、*siyaqti* については間接証拠性という観点からは記述されていない。本発表では、*siyaqti* は間接証拠性を表すのかという問題について議論する。まず、両者における前置要素の差異について、コーパス調査と母語話者への聞き取り調査の結果を述べ、次に、両者が表す意味機能について、間接証拠性を基準にした母語話者への聞き取り調査の結果について述べる。これらの調査の結果、*eken* は定動詞を前置しうるが *siyaqti* は定動詞意志以外の定動詞の前置を許容しないこと、未来の事象には *eken* が用いられないこと、意外性を表す場合と口承文芸には *siyaqti* が用いられないことを明らかにした。以上の調査結果の考察により、*siyaqti* は、話者の判断を表すという点から、典型的には間接証拠性を表す要素ではなく認識的モダリティを表す要素である、と結論付ける。

### 1. はじめに

カザフ語 (チュルク諸語北西語群) では、聞き手の額に手を当てて、聞き手に熱があると話者が知覚したとき、(1) のように二通り (*eken* あるいは *siyaqti*) に表現される。

(1) *istiy-iy bar {eken/siyaqti}*.

heat-2SG.POSS existence EVID/be.like

「君は熱があるようだ。」(*siyaqti* を含む文は日高 2023: 120 より引用)

従来の研究では、この二つの小詞の比較は行われていない。*eken* が間接証拠性を表すとみなされるのに対し (Johanson 2003, 2018, Muhamedowa 2016: 181-185)、*siyaqti* は「不正確さを表す語気助詞」の一つとみなされ、「いくつかの兆候によれば文中の状況が真実でありうる」ことを表すとされている (張 2004: 624)。本発表は、カザフ語の *siyaqti* も *eken* と同じく間接証拠性を表すのかという問題について、web コーパス (Turkic web — Kazakh) と母語話者からの聞き取り調査をもとに議論する。結論として、*siyaqti* は認識的モダリティを表すと主張する。

本発表の構成は次のとおりである。2 節で先行研究を概観したのちに問題提起を行う。3 節で前置要素に関する調査、4 節では意味機能に関する調査について、それぞれ述べる。5 節で調査結果をもとに考察を行い、結論と今後の課題を述べる。なお、本発表における例文番号・グロス・日本語訳・文字飾り (太字・下線など) はすべて発表者による。ことわりのない限り、キリル文字翻字は Muhamedowa (2016: xvii) による翻字を採用する。

### 2. 先行研究概観と問題提起

*eken* は、コピュラ動詞の過去形動詞形 *ĀR-KĀN* [be-PTCP.PAST] が起源だとされている (Johanson 2018: 516)。また、*eken* は、非動詞語幹のみならず、様々な動詞形式に後続可能である。Muhamedowa (2016: 182) は、非過去 *-A<sup>1</sup>*、現在進行を表す補助動詞 *-(Ip) žatır* [lie.AOR]/*otır* [sit]/*tur* [stand]/*žür* [go]、過去 *-DI*、完了 *-GAN*、推測 *-(A)r*、意図 *-MAK* に *eken* が後続可能であるとしている (ただし、Friedman 2010: 439 によれば、*eken* に前置される *-(A)r* は疑問文でのみ用いられるという)。*eken* のあとには主語の数・人

<sup>1</sup> 以降、母音調和・子音調和による異形態の代表形を大文字にて表記する。

称に一致する人称付属語が続く。(2) は非動詞語幹に *eken* が続き、(3) は完了 *-GAn*<sup>2</sup>に *eken* が続いている。両例とも *eken* に 2 人称主語に一致する *=siz* が続いている。

(2) *Ānši eken=siz yoy!*<sup>3</sup>  
 singer EVID=2PL well  
 ‘As I heard, you are a singer.’ (Muhamedowa 2016: 182)

(3) *Almatī-da tuw-īp ös-ken eken=siz yoy.*  
 almaty-LOC born-CVB.SEQ grow.up-PRF EVID=2PL well  
 ‘As I heard, you have been born and grown up in Almaty!’ (Muhamedowa 2016: 182)

Johanson (2003, 2018) は、他のチュルク諸語にも *eken* と同源の形式 (現代ウイグル語 *iken*、ウズベク語 *ekan* など; ただし、トルコ語などでは *=(y)mİş*) が見られ、それらが間接証拠性を表すとみなしている。Johanson (2003: 274-275) によれば、間接証拠性は、「述べられた事象が受容者に認知されたことが述べられる」ことを意味し、受容者の認知は i. 伝聞、ii. 推論、iii. 知覚を通して実現するという。i. 伝聞による認知の基盤は、外からのソース・伝えられた会話・伝聞であり、トルコ語の *Bakan hasta=ymiş* [minister sick=EVID] 「(私が聞いたところでは、) 牧師は病気である。」という例が挙げられている。ii. 推論による認知の基盤は、純粋な内省、論理的な帰結であり、トルコ語の *Uyu-muş-um* [sleep-PAST.EVID-1SG] 「私は (明らかに) 眠ったようだ。」という例が挙げられている。iii. 知覚による認知の基盤は、直接体験による認知、直接的なあるいは間接的な知覚による事象の認知であり、*İyi çalıyor=muş* [good play-PROG=EVID] 「(私が演奏を聞いたところ、) 彼/彼女は上手に演奏している」という例が挙げられている。さらに、*eken* をはじめとする間接証拠性を表す要素が意外性 (mirativity) を表すこと (トルコ語の例 *Bu kız ne güzel=miş!* [this girl what beautiful=EVID] 「この女の子はなんて美しいんだろう!」; Johanson 2003: 284)、民話などの伝統的な口承文芸において、語られる事象から語り手を分離する役割を果たすこと (現代ウイグル語の例: *Burun bir padişa öt-üptu; un-ıñ bir bali-si bar iken* [formerly a ruler live-EVID.PAST; (s)he-GEN a child-POSS.3 existing EVID] 「昔々一人の為政者が住んでいたそう。彼/彼女には一人の子供がいたそう。」; Johanson 2003: 287) についても述べられている。

*siyaqtı* は、張 (2004: 624) によれば、「不正確さを表す語気助詞」の一つとされ、*sajaq* 「外見」+ *-ta* 「～持ちの」から成り、「いくつかの兆候によれば文中の状況が真実でありうる」ことを表すという<sup>4</sup>。ただし、*sajaqta* の前に位置しうる要素について指摘はなく、(4) のように非動詞を前置する例のみが挙げられている (形態素および例文の表記は張 2004: 624 による)。

(4) *kel-gen dğol-amaz {osä /bul emes} sajqatä.*  
 come-PTCP.PAST way-1PL.POSS that this NEG EVID  
 「我々が来た道はそれのようだ/これではないようだ。」(張 2004: 624)

なお、*siyaqtı* は「～のような/～のように」という意味を表す後置詞としても機能しうる。

(2) と (3) 直下で挙げたように、Johanson (2003, 2018) では *eken* が間接証拠性を表すとされているが、*siyaqtı* の間接証拠性については述べられていない。しかし、(1) では、知覚を通じた話者の認知を表す

<sup>2</sup> *-GAn* は定動詞完了あるいは形動詞過去を表すが、本発表では、*eken* あるいは *siyaqtı* に前置される *-GAn* は、完了を表すのではなく単に過去を表すため (8b 参照)、形動詞過去であるとみなす。

<sup>3</sup> Christopher (2020: 106) は、*yoy* が対比 (contrastivity) あるいは旧情報 (givenness) を表す、情報構造に関わる要素であると指摘している。

<sup>4</sup> 張 (2004: 624) は、他にも同じ構成で同じ意味を持つとする *səqaldä, sekildi (səqal, sekil* 「外見」、*-dä, -di* 「～持ちの」) を挙げており、この中でも一般的に用いられるのは *sajaqta* であるとしている。そのため、本発表では *sajaqta* を取り上げる。

ために *eken* あるいは *siyaqtı* が用いられている。このことから、*siyaqtı* も、*eken* と同じく間接証拠性を表すと予想できる。本発表では、まずは両者における前置要素の差異について調査を行い、次に両者が表す意味機能について間接証拠性を基準にして調査を行い、それらの調査結果をもとに、カザフ語の *siyaqtı* も *eken* と同じく間接証拠性を表すのかという問題を議論する。

### 3. 前置要素に関する調査

本節では、*eken* と *siyaqtı* の前置要素に注目し、コーパス調査と母語話者からの聞き取り調査についてまとめ、両者の形態的な特徴を明らかにする。

#### 3.1. コーパス調査

本節では、Web コーパス (Turkic web-Kazakh) を用いた、文末の *eken* と *siyaqtı* に前置されうる要素についての調査をまとめる。本発表の分析対象である *eken* と *siyaqtı* は文末に位置するが、接辞や接語が後接しうる。そのため、まず接辞・接語が後続した例を含む用例<sup>5</sup> (*eken* が 345,940 例、*siyaqtı* が 97,668 例) を抽出し、さらに検索対象語の一つ右隣にピリオドが含まれている例をソートした。本稿では、それぞれ最初の 100 例を調査対象とした。右の表 1 に結果を挙げる。

コーパス調査では、*siyaqtı* には定動詞が前置される例がなく、他方、*eken* には非過去形動詞が前置される例がないことが明らかとなった。Muhamedowa (2016: 182) では、*eken* には、上記以外にも過去 *-DI*、推測 *-(A)r*、意図 *-MAK* が前置可能であるとされているが (2 節参照)、それらが前置される例はコーパス調査では見られなかった。

#### 3.2. 聞き取り調査

母語話者 2 名 (1. 女性・アルマトゥ出身・1994 年生、2. 女性・シムケント出身・1994 年生) に、32 の例文 (3 種の動詞 (非意志自動詞、意志自動詞、他動詞) の定動詞形あるいは形動詞形、名詞類、存在を表す述語のいずれかが主節の述部として用いられている文) の許容度を尋ねた。右の表 2 に結果を挙げる。表中で黄色く塗りつぶされた箇所は、コーパス調査の結果 (表 1) に対応している。表中の○は例が許容されたこと、×は許容されなかったことを表す。

まず、*eken*、*siyaqtı* のいずれか一方が許容されない例を挙げる。形動詞非過去では *eken* は許容されないが *siyaqtı* は許容される。

- (5) a. \**bügin žañbir žaw-atın eken.*      b. *bügin žañbir žaw-atın siyaqtı.*  
 today rain fall-PTCP.NPST EVID      today rain fall-PTCP.NPST be.like  
 「今日雨が降るようだ。」

定動詞非過去の場合、*eken* は許容されるが、*siyaqtı* は許容されない。

表 1: *siyaqtı* と *eken* の前置要素一覧

		<i>eken</i>	<i>siyaqtı</i>	
動詞	形動詞	過去	50	38
		非過去	0	13
	定動詞	非過去	23	0
		進行	2	0
		過去	0	0
		推測	0	0
	意図	0	0	
非動詞	名詞類	19	45	
	存在	6	4	
計		100	100	

表 2: 聞き取り調査の結果

		<i>eken</i>	<i>siyaqtı</i>	
動詞	形動詞	過去	○	○
		非過去	×	○
	定動詞	非過去	○	×
		進行	○	×
		過去	×	×
		推測	×	×
	意図	○	○	
非動詞	名詞類	○	○	
	存在	○	○	

<sup>5</sup> Concordance の検索窓に *сияқты\** あるいは *екен\** を入れて用例を検索した。

- (6) a. *bügin žaᅇbir žaw-a=dī eken.*      b. *\*bügin žaᅇbir žaw-a=dī siyaqtī.*  
 today rain fall-NPST=3 EVID      today rain fall-NPST=3 be.like  
 「今日雨が降るようだ。」

定動詞進行の場合、*eken* は許容されるが、*siyaqtī* は許容されない。*siyaqtī* では、進行中の事象には、c. に挙げたように、*-(i)p žat-*補助動詞の形動詞過去 *-(I)p žat-qan* が用いられる。

- (7) a. *ol žaponša kitap oqī-p žatīr eken.*  
 3SG Japanese book read-CVB.SEQ lie.AOR EVID  
 b. *\*ol žaponša kitap oqī-p žatīr siyaqtī.*  
 3SG Japanese book read-CVB.SEQ lie.AOR be.like  
 c. *ol žaponša kitap oqī-p žat-qan siyaqtī.*  
 3SG Japanese book read-CVB.SEQ lie-PTCP.PAST be.like  
 「彼は日本語の本を読んでいるようだ。」

次に、*eken, siyaqtī* どちらも許容されない例を挙げる。調査協力者の二名とも、過去のことを表す場合には定動詞過去ではなく形動詞過去を用いる、と指摘した。これは、2節冒頭に挙げた Muhamedowa (2016: 182) による指摘「*eken* は定動詞過去 *-DI* に後続する」とは異なる結果を示している。

- (8) a. *\*ol keše kino-ya bar-dī {eken /siyaqtī}.*  
 3SG yesterday film-DAT go-PAST EVID be.like  
 b. *ol keše kino-ya bar-yan {eken. /siyaqtī}.*  
 3SG yesterday film-DAT go-PTCP.PAST EVID be.like  
 「彼は昨日映画に行ったようだ。」

推測 *-(A)r* も許容されない。調査協力者の二名とも、未来を表す場合、*eken* には定動詞非過去 (9a)、*siyaqtī* には形動詞非過去 (9b) を用いる、と指摘した。

- (9) *\*bügin žaᅇbir žaw-ar {eken/ siyaqtī}.*  
 today rain fall-INFR EVID be.like  
 [意図した読み：今日雨が降るようだ]

最後に、意図 *-MAK* の例を挙げる。調査協力者の二名とも、文法的には可能ではあるが、聞いたことがないと述べている。

- (10) *aliyšer xat žaz-baq {eken /siyaqtī}.*  
 PN letter write-ITT EVID be.like  
 [意図した読み：アリーシェルは手紙を書くつもりようだ。]

以上の調査より、*eken* には形動詞非過去が前置されず、形動詞過去ならびに定動詞非過去・定動詞進行・定動詞意図が前置されるが、*siyaqtī* には形動詞過去も非過去も前置され、定動詞意図以外の定動詞が前置されないことが明らかとなった。5節で、*eken* と *siyaqtī* における前置要素の差異について述べる。

#### 4. 意味機能に関する調査

本節では、間接証拠性と未来の予測に着目して行った、母語話者への聞き取り調査について述べる。表 3 に挙げた間接証拠性の各ラベルの詳細は 2 節を参照されたい。本節では、未来の予測について詳細を述べる。2 節に挙げた Johanson (2003) による間接証拠性の定義を解釈すれば、「話者＝受容者が何らかの証拠によって間接的に事象を認知する」ことが間接証拠性の定義の核であると言える。つまり、話者の認知時点では発話時かそれ以前に事象は起きているはずであり、発話時以降に起こりうる事象には間接証拠性は関わり得ない。したがって、間接証拠性を表すとされている *ekan* は未来の予測を表さない

と予想できる。以上の理由から、本節で述べる聞き取り調査では未来の予測というラベルを採用した。

母語話者 2 名 (3.2 節と同じ協力者) に、36 例 ((1. 伝聞、2. 知覚、3. 推論、4. 意外性、5. 民話などの口承文芸での使用、6. 未来の予測、各 3 例) × 2 種の小詞 [*eken*, *siyaqtī*] の許容度を尋ねた。右の表 3 に結果を挙げる。○は両者とも全 3 例を許容したこと、×は両者とも全 3 例を許容しなかったこと、?は母語話者間の判断が一致しない例があることを、それぞれ表す。

表 3: 聞き取り調査の結果

		<i>eken</i>	<i>siyaqtī</i>	
間 接 証 拠	情 報 源	伝聞	○	○
		知覚	○	?
		推論	?	?
	意外性	○	×	
	民話などの口承文芸	○	×	
未来の予測		×	○	

調査結果について、表の上から順に述べる。伝聞 (11) では、*siyaqtī* と *eken* のどちらも許容される。協力者の一人によれば、(11) において、*eken* は本人から直接聞いたときに使うが、*siyaqtī* は本人以外から聞いたときに使うという。

- (11) *esti-w-im=še, ol awir-ip qal-gan {eken /siyaqtī}.*  
 hear-VN-1SG.POSS=ADV LZ 3SG be.ill-CVB.SEQ remain-PTCP.PAST EVID be.like  
 「私が聞いたところによると、彼は病気だったようだ。」

知覚 (12) では、*eken* は母語話者間での判断が一致したが *siyaqtī* は一致しなかった。協力者の一人は、下記の例で *siyaqtī* は使えないと判断した。

- (12) *ol pianino-da žaqsi {oyna-y=dī eken. /? oyna-tin siyaqtī}.*  
 3SG piano-LOC good play-NPST=3 EVID play-PTCP.NPST be.like  
 「(目の前でピアノを弾いているのを話者が聴いて) 彼はピアノを上手に弾くようだ。」

推論では、母語話者間での判断が *siyaqtī* でも *eken* でも一致しなかった。(13) では協力者の二名とも *siyaqtī* を許容したが、*eken* については判断が一致せず、(14) では二名とも *eken* は許容したが、*siyaqtī* については判断が一致しなかった。

- (13) *keše žaḡbir žaw-yan {? eken. /siyaqtī}.*  
 yesterday rain fall-PTCP.PAST EVID be.like  
 「(水たまりを見て) 昨日雨が降ったようだ。」

- (14) *men uyiqta-p qal-yan {ekem. /? siyaqtī}.*  
 1SG sleep-CVB.SEQ remain-PTCP.PAST EVID.1SG like  
 「(次の日が試験のため徹夜しようとしたが) 私は眠ってしまったようだ。」

意外性 (15) では、*siyaqtī* が許容されなかった。

- (15) *aliyšer tokiyo-ya ket-ken {eken. /\*siyaqtī}.*  
 PN PLN-DAT leave-PTCP.PAST EVID be.like  
 「(アリーシェルが東京に行ったことを知って) アリーシェルが東京に行ったのか！」

民話などの口承文芸 (16) での使用でも、*siyaqtī* が許容されなかった。

- (16) *ertede bir šal pen kempir bol-gan {eken /\*siyaqtī}.*  
 in.old.time one old.man and old.woman be-PTCP.PAST EVID be.like  
 「昔々おじいさんとおばあさんがいたそうな。」

未来の予測 (17) では、*eken* が許容されない。

- (17) *ol bolašaqta tez-irek {\*žügir-e-di eken. /žügir-etin siyaqtī}.*  
 3SG future quick-COMP run-NPST-3 EVID run-PTCP.NPST be.like  
 「(たくさん練習しているのを話者が見て) 彼は将来早く走るようになるでしょう。」

以上の調査より、次の4点が明らかとなった: 1. 伝聞・知覚・推論では *eken* と *siyaqti* が両方とも用いられうる、2. 意外性を表すには *eken* が用いられるが *siyaqti* は許容されない、3. 民話などの口承文芸でも *eken* が用いられるが *siyaqti* が許容されない、4. 未来の予測には *eken* が用いられるが *eken* が許容されない。

## 5. おわりに

前置要素に関する調査 (3 節) では、*siyaqti* には形動詞非過去も形動詞過去も前置されるのに対し、*eken* は定動詞 (非過去、進行) の前置を許容するが形動詞非過去の前置は許容しないことが明らかとなった。この結果は、*siyaqti* 中の名詞 *siyaq* 「外見」が形動詞によって連体修飾されている構造が想定できることによると考えられる。カザフ語では、(18) に示したように、形動詞あるいは形容詞に名詞を後置することで、名詞の連体修飾が行われる。(18) では、形動詞非過去の後に名詞が位置することで、形動詞非過去「読む」が名詞「本」を修飾している。*siyaqti* が用いられている (5b) において、形動詞非過去 *żaw-atin* 「降る」が名詞 *siyaq* 「外見」を修飾していると考えれば、(5b) は(18) と同じ連体修飾構造を持つと言える。ただし、*siyaqti* は前置要素として名詞・代名詞も取りうる (例えば、(4) を参照されたい)。この点も考慮に入れて *siyaqti* の用法拡大、つまり文法化について論じる必要があるが、これについては改めて別稿で議論したい。

意味機能に関する調査 (4 節) では、次の4点が明らかになった: 1. 伝聞・知覚・推論では *eken* と *siyaqti* が両方とも用いられうる、2. 意外性を表すには *eken* が用いられるが *siyaqti* は許容されない、3. 民話などの口承文芸でも *eken* が用いられるが *siyaqti* が許容されない、4. 未来の予測には *eken* が用いられるが *eken* が許容されない。

まず、伝聞で *eken* と *siyaqti* が両方とも用いられるという点について特に考察する。(11) では、協力者から、*eken* は病気であったことを本人から直接聞いたときに使うが、*siyaqti* は本人以外から聞いたときに使うという指摘を得た。したがって、*eken* の場合は病気になった本人が病気であったことを話者がそのまま伝えているため、話者の判断が入る余地はないと言える。一方、*siyaqti* の場合は病気をした本人ではなく他人から聞いた情報であるため、「彼が病気であった」という事態に疑念などの話者の判断が入りうる。これは、*siyaqti* が意外性を表さないことと、口承文芸に用いられないことに深く関わると考えられる。意外性を表す場合は、話者が想定していない事態が起きた／起きていることを述べており、話者の判断が入る余地がない。口承文芸の場合でも、話者が聞いたものをそのまま語っている、つまり、語られる事象と話者が分離される (2 節参照) ため、当然、話者の判断が入る余地がない。したがって、*eken* は証拠から認識した事を話者の判断を通さずに提示するのに用いられるが、*siyaqti* は事象に対する話者の判断を表すのに用いられると言える。

次に、未来の予測に *eken* が用いられず、*siyaqti* のみが用いられることについて考察する。Johanson (2003) は間接証拠性を表すものとして *eken* を挙げており、本発表でも *eken* は間接証拠性として挙げられている意味機能全てを表うことを示し、発話時以降に起こりうる事象を表せないことを明らかにした。これに対して、*siyaqti* は間接証拠性の中では伝聞・知覚・推論による事象の認知を表すが、間接証拠性とは無関係の、発話時以降に起こりうる事象も表しうることを示した。したがって、発表者は、*siyaqti* は、典型的には間接証拠性を表す要素ではなく認識的モダリティを表す要素である、と結論付ける。Palmer (2001: 8) は、命題が真であるかどうかについて、認識的モダリティは話者の判断を表すが、証拠

性モダリティは証拠があることを示す、と述べている。

最後に今後の課題を述べる。*siyaqti* の記述をより精緻にするには、話者の判断が入るかどうかという観点から詳細に記述を行う必要がある。例えば、4 節の聞き取り調査では、知覚と推論の例で協力者の判断が一致しなかった。これは、話者の判断が全く入りえない状況と入りうる状況を適切に設定することで防ぐことができよう。また、他のチュルク系の言語でも、*eken* と、*eken* に似た機能を持つ小詞の存在が指摘されている。例えば、Hidaka (2023) では、ウズベク語 (チュルク諸語南東語群) における *o'xsha*-「似る」のモダリティ用法 (推定「~ようだ」を表す用法) と *eken* との比較を行っている。今後は、チュルク諸語間における、*eken* と、*eken* に似た機能を持つ小詞の対照も視野に入れたい。

## 謝辞

本発表は、JSPS 科研費 JP21H04346, JP22J01538, JP22KJ1443 の助成を受けたものである。

本発表は、カザフ語母語話者二名の方からの協力を得て成しえたものである。ここに彼女らに深い感謝の意を表す。無論、本発表での誤りは、協力者に一切の責はなく、発表者に帰するものである。

## 略号一覧

-	形態素境界	EVID	evidential	証拠性	PLN	place name	場所名
=	接語境界	GEN	genitive	属格	PN	person name	人名
1	一人称	INFR	inferential	推量	POSS	possessive	所有
2	二人称	ITT	intention	意志	PRF	perfective	完了
3	三人称	LOC	locative	処格	PROG	progressive	進行
ADV LZ	adverbializer	副詞化	NEG	negative	PTCP	participle	形動詞
AOR	aorist	アオリスト	NPST	non-past	SEQ	sequential	継起
COMP	comparative	比較級	PAST	past	SG	singular	単数
CVB	converb	副動詞	PL	plural	VN	verbal noun	動名詞
DAT	dative	与格					

## 参考文献

- Christopher, Nadezda (2020) Kazakh Particle *ğoj* as an Existential Operator. Modicom, Pierre-Yves and Olivier Duplâtre (eds.) *Information-Structural Perspectives on Discourse Particles*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Friedman, Victor A. (2010) When is a Present not Present? — Turkish *İmiş*, Kazakh *Eken*, and the Albanian Admirative. Erdal, M., Kappler, M., Kirchner, M., Zieme, P., & Muhamedowa, R. (eds.) *Trans-Turkic studies: Festschrift in Honour of Marcel Erdal*. Istanbul: Mehmet Ölmez Yayınları.
- Johanson, Lars. (2003). Evidentiality in Turkic. Aikhenvald, A. Y. & R. M. W. Dixon (eds.) *Studies in Evidentiality*. 273–290. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Johanson, Lars. (2018). Turkic Indirectivity. Aikhenvald, A. Y. (ed.) *The Oxford Handbook of Evidentiality*. 509–524. Oxford: Oxford University Press.
- 日高晋介 (2023) 「中央アジアのチュルク諸語におけるモダリティ対照の試み」『言語の普遍性と個別性』14: 109–135.
- Hidaka Shinsuke (2023) Does the modal Uzbek sentence with *o'xsha*- include a subordinate clause? The 21st International Conference on Turkish Linguistics. Johannes Gutenberg University Mainz. 3 August 2023.
- Muhamedowa, Raihan (2016) *Kazakh: A Comprehensive Grammar*. London, New York: Routledge.
- 中嶋善輝 (2013) 『カザフ語文法読本』東京: 大学書林.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and Modality. Second edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 张定京 (2004) 『现代哈萨克语实用语法 (语法形式篇)』北京: 中央民族大学出版社.

## Web corpus

*Turkic web – Kazakh*. <https://www.sketchengine.eu/kkwac-kazakh-corpus/> [最終閲覧日: 2023/10/03]